

「古墳時代の祭祀 – 手捏土器^{てづくね}」

土浦市木田余東台にある^{きだまり}粉買場遺跡（第 2 次調査）の^{たてあなたてもの}竪穴建物から 18 点の手捏土器が出土しています。今号では手捏土器についてご紹介します。

手捏土器とは、ろくろなどを使わず、手で練りつくねて作った土器をいいます。特に、ろくろ技術の発達した古墳時代のもので、小型で粗い作りの素焼きの土器を手捏土器と呼んでいます。これらは、祭祀遺跡などから見つかることが多く、一般的な容器ではなく、祭祀的な性格を持つものです。市内の山川古墳群からは、約 20 点の手捏土器が出土しています。これらは、帆立貝式前方後円墳の^{しゅうこう}周溝内埋葬施設から見つかったもので、棺の上に土器が置かれ、祭祀が執り行われたと考えられるものです。古墳時代終末期、6 世紀末から 7 世紀初頭に位置づけられます。

では、粉買場遺跡から見つかった手捏土器はどのように出土したのでしょうか？これらは、第 2 号竪穴建物の床面直上から覆土にかけて、投げ込まれたようにまとまって出土しました。他に手捏ねの土製品や炭化したモモ核も出土しました。建物廃絶後に祭祀が執り行なわれたようです。遺跡で見つかるモモ核も祭祀と大きく関わる植物です。これらは古墳時代後期後葉、7 世紀前半に位置づけられます。手捏土器は、大変粗い作りで、焼成が不良なものも見られました。全面的に指頭による成形を施し非常に粗い作りの丸底のものと、体部が粘土紐によって成形され口縁部が薄く立ち上がる平底のもの大きく 2 種類に分けられます。

祭祀遺物には手捏土器以外にも多くの遺物があります。こういった意味をもつ祭祀であったのか、出土遺跡の特徴や立地環境などを検討していく必要があります。



粉買場遺跡出土 手捏土器（土浦市木田余東台）